

# 中学校・高等学校音楽科における 聴取力育成プログラム開発のための基礎的研究（1）

—聴取力に着目した音楽科学力調査をとおして—

三村 真弓 伊藤 真 泉谷 正則 桑田 一也  
原 寛暁 増井知世子 松前 良昌 光田龍太郎  
藤井 恵子

## 1. はじめに

わが国の音楽科授業における鑑賞の活動は、従来から具体性を欠くことが多かった。平成20年度改訂の中学校学習指導要領（音楽）でもそれは変わっていない。鑑賞領域では、「音楽のよさや美しさを味わうこと。」「…を感じ取って聴き,」「…を理解して聴き,」「…と関連付けて, 鑑賞すること。」「…を感じ取り, 鑑賞すること。」「…を理解して, 鑑賞すること。」となっている。「味わう」「鑑賞する」という言葉が使われ, しかも聴くという行動が「感じ取る」（雰囲気・情景など）「理解する」（知識）とセットになっているために, 何か具体的な内容を「聴き取る」「聴き分ける」ようになっていない。つまり鑑賞という行動の内容が曖昧で具体性がないのである。一方, 諸外国の音楽科教育では, 鑑賞 *appreciation* という言葉は用いられず, それに代わるものとして, 聴取 *listening* や評価 *appraising* や批評 *reviewing* や分析 *analyzing* という言葉が使われている。すなわち, 「味わう」「鑑賞する」という漠然とした行動ではなく, 何か具体的なものを聴取するようになっているのである。

平成20年度改訂の中学校学習指導要領では, 「生徒の言語活動を充実する」ことが明記され, 各教科においても言語力の育成が求められるようになった。これを受けて, 音楽科では鑑賞領域で「言葉で説明する」（第1学年）, 「根拠をもって批評する」（第2学年及び第3学年）ことが内容に加わった。音楽科授業で「言葉で説明する」「根拠をもって批評する」ためには, 共通事項に明記されている音楽の諸要素（音色, リズム, 速度, 旋律, テクスチャ, 強弱, 形式, 構成）の知覚とそれを表す用語や記号の知識が必要となる。

しかし, 問題となるのは, 知覚できるための聴取力が獲得されているか否かであろう。

これまでに本研究者たちは, 中学生の批評能力及び鑑賞能力に着目し, 生徒が表現や鑑賞の授業において, 聴取した音楽表現や楽曲に対して, どのような言葉で評価するのかを明らかにすることを目的とした研究を行った<sup>1)</sup>。その結果, 豊富で質の良い音楽的経験によって生徒の批評能力が向上することがわかり, また鑑賞ポイントをしっかりと把握させることによって生徒の鑑賞能力が向上することもわかった。しかし同時に鋭い聴取力を育成することの必要性も明らかになった。

そこで本研究者たちは, 中学校・高等学校の生徒の聴取力育成を研究課題とすることにした。研究の1年目である今年度は, 中学校1年生を対象として, 聴取力を中心とした音楽科学力調査を行い, 小学校修了程度の内容をどの程度獲得しているのかを明らかにすることを目的とする。

音楽科学力調査問題作成にあたって, まずわが国でこれまでに行われた音楽科学力調査の内容を概観し, 示唆を得ることとする。（三村真弓）

## 2. わが国における音楽科学力調査の概要

文部省が行った全国規模の音楽科の学力調査は, 小学校を対象として, 昭和33年度と昭和41年度に, 過去2度実施されている。昭和33年度の調査は, 国公立小学校（980校）の6年生を対象として行われ, 昭和41年度の調査は, 国公立4,748校（そのうち実施不能校が130校）の5年生を対象として行われた。一方文部科学省は, 平成20年度に「特定の課題に関する調査」として音楽に関する調査を行った。この調査は, 小学

Mayumi Mimura, Shin Ito, Masanori Izumitani, Kazuya Kuwata, Tomoaki Hara, Chiseko Masui, Yoshimasa Matsumae, Ryutaro Mitsuta, Keiko Fujii; A basic study on the development of listening ability (1) —Discussion on analytical results of music achievement test focused on listening ability—.

校6年生と中学校3年生を対象として、小学校は平成20年12月3日～平成21年2月27日に、中学校は平成20年10月1日～平成20年11月28日にかけて実施された。調査対象校は、全国の国公私立学校から無作為抽出され、小学校は約110校、中学校は約100校であった。調査対象児童・生徒数は、どちらも約3,000人である。中学校での音楽の学力調査は初めての試みであった。

音楽科は、芸術教科であり、音楽的知識だけでなく、演奏技術や音楽的能力が学力の重要な部分を占めている。音楽科学力調査の実施回数が少ないのは、ペーパーテストでは測れない能力が学力に多く含まれているからであろう。これまでに行われた音楽科の学力調査では、ペーパーテスト以外に放送課題を採り入れるなど、さまざまな工夫がなされている。

昭和33年度の学力調査では、まえがきに、表現活動の指導のほかに、よい音楽をよくと感じ、感動し、判断する力をつける鑑賞力の育成の必要性が述べられ、表現力・鑑賞力の基盤になるものとして音楽的感覚の洗練の重要性が主張されている<sup>2)</sup>。この音楽的感覚の実態を調査するために放送課題を用い、知的理解に関する事項についてはペーパーテストを行っている。音楽的感覚の調査内容は、調性感、拍子感、速度感、聴音力・読譜力等であり、知識理解の調査内容は、読譜力・記譜力、楽譜の知識等である。前者の音楽的感覚の調査内容は、音楽的感覚と聴取力と内的聴覚力(内的聴感)を測るものである。「3. 速度を聴き分ける能力」は、連続した曲のなかでの速度の変化ではなく、あらかじめ提示されたテンポと、楽曲のテンポとを識別する課題であり、弁別力と記憶力が必要とされるやや高度な内容である。また、「4. 音と楽譜との照合」「8. 楽譜のつなぎ合わせ」は、単なる読譜力だけではなく、視唱力が求められる課題である。

昭和41年度の学力調査では、児童が音楽経験をとおして把握している基礎的事項のうち、主として音楽的感覚を中心とした基礎的能力を見ることをねらいとして問題が構成されている。児童の感得理解の程度などを見ることができ問題が多く出題されている。ラジオ放送を利用した調査を実施するとともに、児童の聴覚的な面に重点をおいた客観テストによる調査も行った<sup>3)</sup>。調査内容は、放送課題と記入課題から構成されている。放送課題の調査内容は、演奏形態の聴取、リズム感・拍子感、速度感、旋律の記憶力、調性感、和声感・終止感、音色感等である。いずれも音楽的感覚と聴取力と音楽的知識が必要とされる内容である。記入課題の調査内容は、階名の読譜力、強弱記号の理解、視唱力等である。

平成20年度の調査は、音楽科における基礎的・基本

的な知識等、感じ取って工夫する力、音楽表現の技能、鑑賞する力の状況を見ることを目的としている<sup>4)</sup>。この調査では、リズムづくり(小学校)や歌唱(中学校)等の実技調査を初めて実施している。コンピュータによる出題では、児童生徒1人ひとりがコンピュータとマイクつきヘッドホンを使用して、つくった音楽や歌唱を録音・再生するなどして、確認をしたり試したりしながら取り組めるようにしている。また、ビデオ(DVD)やコンピュータを用いて、演奏の様子や、教師と児童生徒の会話などの授業風景を視聴することによって、親しみや興味をもって調査問題に取り組めるように配慮している。調査の内容は、調査Ⅰ：音楽科における基礎的・基本的な知識を中心に把握する調査、調査ⅡA：感じ取って工夫する力及び音楽表現の技能を中心に把握する調査、調査ⅡB：鑑賞する力を中心に把握する調査、から構成されている。調査Ⅰの内容は、リズム感・拍子感、調性感、音色感、楽譜・記号等の知識、合唱の形態であり、音楽的感覚と音楽的知識を問う課題となっている。しかし、記号等は限られた簡単なもの(スラーとスタッカート)しか扱われておらず、楽器の音色課題(木を打っている、弦をこすっている、弦をはじいている、管に息を吹き込んでいる)も非常に易しい。全体的に難易度は、過去2回の調査よりも低くなっており、聴取力は求められているものの、解答方式が○×や2択～4択であるために、本当にわかっていなくても正答できる可能性がある。またリズムに関しては、聴取課題や、聴取力の必要なリズム譜の読譜課題はあるが、旋律の聴取課題はない。調査ⅡAは、リズムづくりや旋律づくりの課題であるが、音楽表現の技能を問う内容は見当たらない。調査ⅡBは、鑑賞力を問う内容である。曲想と要素を関わらせて聴取できる力が求められているが、要素や曲想に関しては、アニメーションのなかに正答のヒントが非常に多く盛り込まれている。解答方式も簡単であるので、記述課題以外は通過率が高い。

以上、3回の学力調査の内容を検討した結果、すべての調査で行われていた内容は、長調・短調、拍子、速度、5線譜上の音符の知識に関する課題であった。昭和33年度の調査には無く他の2回の調査で行われたものは、楽器の音色に関する課題であった。音と楽譜の照合に関する課題は、平成20年度の調査以外では2回とも行われていた。それぞれの調査の内容を精査した結果、本調査では、長調・短調の聴き分けに関する課題は、昭和41年度の調査を参考にすることにした。拍子を聴き分ける課題、速度の速い遅いを聴き分ける課題、音と楽譜の照合に関する課題、5線譜上の音符の知識に関する課題、楽器の音色に関する課題は、昭

和33年度の調査を参考にした。平成20年度の調査内容は、課題の難易度が低く、またヒントが多く提示されていたために、正確な学力を判断することはできないと考えて除外した。長調・短調、拍子、速度、音と楽譜の照合、楽器の音色に関する課題は、すべて聴取力を必要とする課題である。5線譜上の音符の知識に関する課題は聴取力を必要としないが、音と楽譜の照合の課題に関連するために、敢えて調査内容に加えた。  
(三村真弓)

## 2. 本音楽科学力調査の内容

今回行った学力調査の内容は以下である。問題は全部で7問あり、問題1から6は放送問題である。

**問題1** これから聴く、ア、イ、ウの3つの旋律のなかに、「短調」の旋律が1つだけあります。短調だと思ふ旋律をア、イ、ウから選び、その記号を書いてください。

**問題2** これから聴くア、イ、ウの3つの音楽のなかに、「3拍子」の音楽が1つだけあります。3拍子だと思ふ音楽をア、イ、ウから選び、その記号を書いてください。

**問題3** これからア、イ、ウの3つの音楽を聴きます。それぞれの音楽の初めに、メトロノームで、カチ、カチと決まった速さを打ちますから、その速さをよく聴いて覚えてください。そして次に聴く音楽の速さをメトロノームのカチ、カチという音で打った速さと比べて、同じ速さだと思ふ音楽をア、イ、ウから選び、その記号を書いてください。

**問題4** この問題は、ピアノで弾く旋律を聴いて、その旋律と合っている楽譜を探し出す問題です。みなさんは、問題用紙の楽譜をよく読みながら、放送のピアノを聴いてください。それぞれ、合っている楽譜を1から3のなかから1つ選んで、その番号を○でかこんでください。(C-dur, 6/8拍子, 開始音と終止音とリズムが同じで、旋律が若干違う課題が3題)

**問題5** この問題も問題4と同じです。それぞれ、合っている楽譜を1から3のなかから1つ選んで、その番号を○でかこんでください。(C-dur, 4/4拍子, 開始音と終止音と旋律が同じで、リズムが若干違う課題が3題)

**問題6** これから聴く①から⑧の旋律は、下に示した楽器のいずれかで演奏されています。旋律を聴いて、正しいと思ふ楽器を1から12のなかから選んで、その番号を書いてください。(放送課題は、フルート、クラリネット、トランペット、ホルン、ヴァイ

オリン、チェロ、ティンパニ、シンバル)

**問題7** 下を書いてある階名(ドレミ)を5線譜に全音符で書き入れなさい(ソ、レ、ラ、ミ、高いド、高いミ、シャープのついたファ、フラットのついたシ)。

問題6は、正解の8楽器の名称に加えて、オーボエ、トロンボーン、箏、木琴(マリンバ)を加えた12楽器の名称のなかから、正解を記号で選択させる課題である。正解の8楽器は、いずれも小学校の教科書のなかで取り扱われている楽器である。順序の効果を排除するため、クラスごとに提示の順番を変えて出題した。問題1で用いた曲は、昭和41年度の学力調査の課題を参考にし、問題2～6で用いた音楽は、昭和33年度の学力調査の課題を参考にして、伊藤が新たに作曲した。問題6で各楽器が演奏した曲は、打楽器を除いていずれも「ふるさと」の最初の8小節である。調は統一していない。問題7の課題は、昭和33年度の調査とまったく同一である。

調査の概要は以下である。

調査の時期：平成23年1月

調査の対象：4中学校の1年生(計161名)

A中学校1年生(40名)

B中学校1年生(41名)

C中学校1年生(40名)

D中学校1年生(40名)

学力調査に合わせて、音楽の習い事の有無、音楽系の部活動の有無のアンケート調査も行った。

(伊藤 真)

## 3. 調査の結果と考察

### (1) A中学校の結果

A中学校の採点結果は、図1のとおりである。

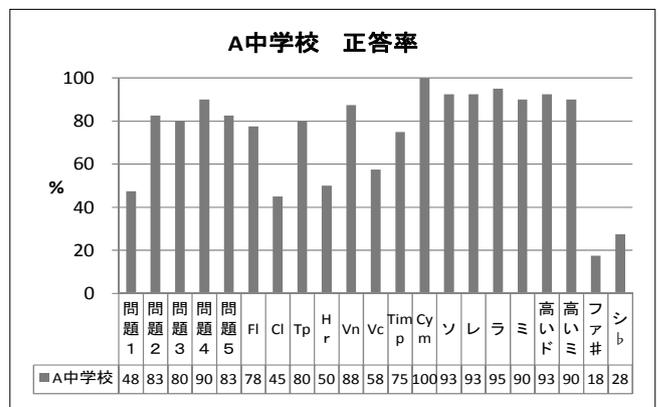


図1 A中学校の正答率

長調・短調を聴き分ける問題1は、正答率48%であり、約半数の生徒ができていない。拍子を聴き分ける

問題2, 速度を聴き分ける問題3, 音と楽譜の照合の問題4と問題5の正答率は, 80%~90%とかなり高いといえる。楽器の音色を聴き分ける問題6では, クラリネット (45%), ホルン (50%), チェロ (58%) の正答率が低い。記譜問題の問題7では, 幹音はいずれも90%以上の正答率であって, ほとんどの生徒が音符の記入ができることがわかる。しかし, 派生音の正答率は, それぞれ18%, 28%と非常に低い。#やbを全音符の右につけていたり, 高さを間違えていたりする生徒が非常に多かった。

### (2) B中学校の結果

B中学校の採点結果は, 図2のとおりである。

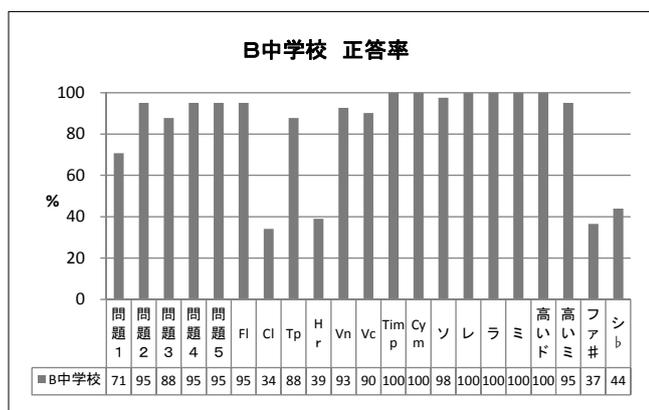


図2 B中学校の正答率

長調・短調を聴き分ける問題1は, 正答率71%であり, やや低いが, 拍子を聴き分ける問題2, 速度を聴き分ける問題3, 音と楽譜の照合の問題4と問題5の正答率は, 89%~95%とかなり高い。楽器の音色を聴き分ける問題6では, フルート, トランペット, ヴァイオリン, チェロ, ティンパニ, シンバルが88%から100%と非常に高い正答率を示しているのに対して, クラリネット (34%), ホルン (39%) の正答率は極端に低い。記譜問題の問題7では, 幹音はいずれも95%以上の正答率であるが, 派生音の正答率は, それぞれ37%, 44%と低い。

### (3) C中学校の結果

C中学校の採点結果は図3のとおりである。

長調・短調を聴き分ける問題1は, 正答率80%であり, かなりできている。拍子を聴き分ける問題2, 速度を聴き分ける問題3, 音と楽譜の照合の問題4と問題5の正答率も, 93%~100%とかなり高い。楽器の音色を聴き分ける問題6では, フルート, トランペット, ヴァイオリン, ティンパニ, シンバルが85%~100%と高い正答率を示し, クラリネット, チェロが70%~75%という正答率であるが, やはりホルンの正

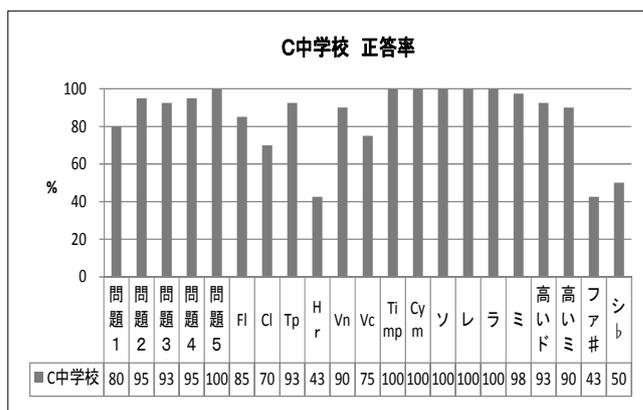


図3 C中学校の正答率

答率は43%と低い。記譜問題の問題7では, 幹音はいずれも90%以上の高い正答率であるが, それに比べると派生音の正答率は, それぞれ43%, 50%と低くなっている。

### (4) D中学校の結果

D中学校の採点結果は, 図4のとおりである。

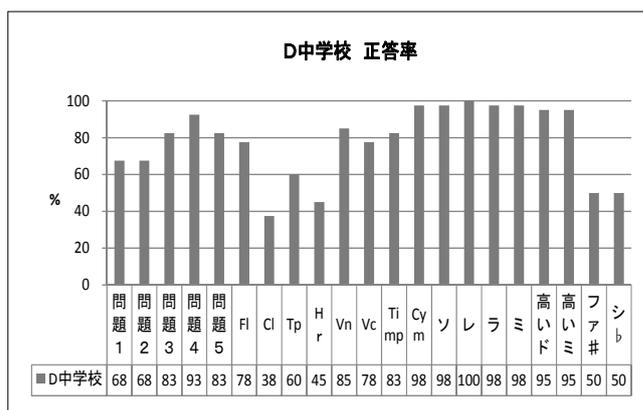


図4 D中学校の正答率

長調・短調を聴き分ける問題1と, 拍子を聴き分ける問題2はいずれも68%の正答率であり, 速度を聴き分ける問題3, 音と楽譜の照合の問題4と問題5の正答率83%~93%と比べるとやや低い。楽器の音色を聴き分ける問題6では, フルート, ヴァイオリン, チェロ, ティンパニ, シンバルが78%~98%と高い正答率を示し, トランペットは60%という正答率であるが, やはりクラリネットとホルンの正答率はそれぞれ38%, 45%と低い。記譜問題の問題7では, 幹音はいずれも95%以上の高い正答率であるが, それに比べると派生音の正答率は, それぞれ50%と低くなっている。

### (5) 全体の傾向

次に, 4校全体の正答率を見てみよう (図5参照)。

問題1から問題5のなかでは, 長調・短調を聴き分ける問題1の正答率が66.5%と低い。長調・短調の課

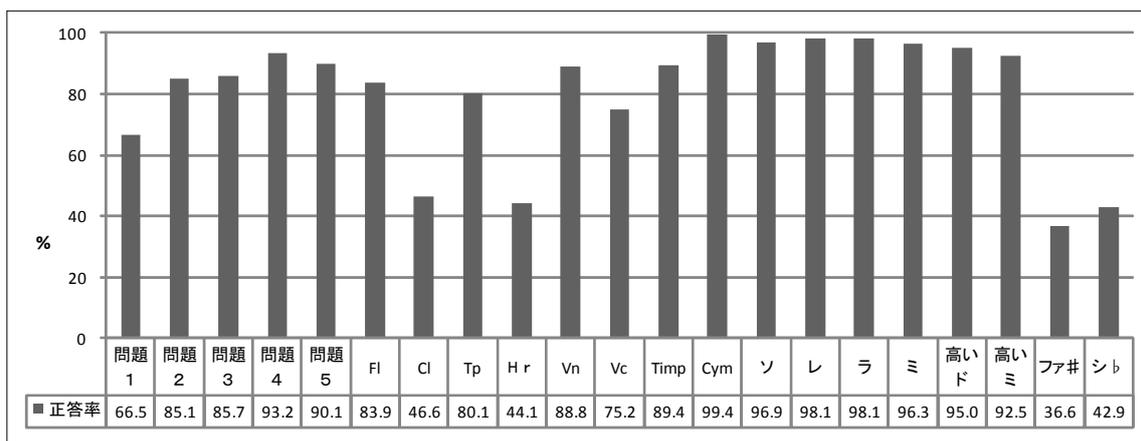


図 5 4校全体の正答率

題の正答率は、昭和33年度の調査では57.7%<sup>5)</sup>、昭和41年度の調査でも57.7%<sup>6)</sup>、平成20年度の調査では31.7%<sup>7)</sup>と圧倒的に低い。他の問題に比べて、調性を聴き分けることはかなり困難であることがわかる。拍子を聴き分ける問題2と速度を聴き分ける問題3は、ともにおよそ85%であり、拍子・速度を聴き分ける力はかなり育っていると言えよう。

音と楽譜の照合を課題とする問題4（旋律課題）と問題5（リズム課題）は、ともに90%以上の高い正答率であった。問題7の記譜の知識を問う課題では、ファ#とシ♭の派生音の課題を除いた、幹音6問を全問正解した生徒は、全161名中145名であり、約90%の高い正答率であった。ファ#の正答率は36.6%、シ♭の正答率が42.9%であったが、正答率が低かった原因は、#や♭の位置が音符の左側ではなく、右側についていたり、左側につけていても高さが不正確であったためである。したがって、今回の調査対象校の生徒たちは、ほとんどの生徒が読譜・記譜の力があるということになる。派生音の課題を除いた、幹音6問を全問正解した生徒145名のうち、問題4の正答率は94.5%、問題5の正答率は91.7%であった。これらの生徒は、楽譜上の音が何であるかわかるだけでなく、聴取した音高が何の音だかわかり、それが楽譜の知識と結び付いている、すなわち内的聴覚が育っていることを示している。逆に幹音6問を全問正解していても、問題4と問題5が不正解であった生徒は、楽譜上の知識はあっても、音高を聴取する力に欠けていることを示している。

問題6の楽器の音色に関しては、楽器によって正答率にかなり差があることがわかった。打楽器のティンパニとシンバルは、ともに高い正解率であった。B中学校とC中学校では両楽器は100%の正答率であり、A中学校でもシンバルの正答率は100%であった。選択肢のなかのダミーの打楽器が鍵盤系の木琴（マリンバ）だったこともあり、旋律をもたない打楽器は、他

の楽器と明らかに違うため、聴き分けやすかったことがわかる。一方、木管楽器のフルートとクラリネットでは、圧倒的にクラリネットの正答率が低い。同様に金管楽器のトランペットとホルンでも、圧倒的にホルンの正答率が低い。ダミーの楽器として、木管楽器のオーボエ、金管楽器のトロンボーンを選択肢のなかに入れたために、それらを誤答するものが多く見られた。弦楽器のヴァイオリンとチェロは音域が違うために聴き分けやすく、正答率も高くなっている。選択肢のなかのダミーの弦楽器は箏であり、明らかに音色が違うのも、正答率をあげた原因であろう。楽器全体の平均した正答率は75.9%となり、まずまずの成績であった。

次に、学力調査と合わせて行った、音楽の習い事の有無及び音楽系の部活動の有無に関するアンケート調査の結果から、音楽経験の有無別に正答率を比較したものが図6である。音楽の習い事あるいは音楽系の部活動などの音楽科授業以外での音楽経験がある生徒（以下、音楽経験有群）は全161名中89名であり、音楽科授業以外での音楽経験がない生徒（以下、音楽経験無群）は72名であった。学校外で音楽の習い事をしないで音楽系の部活動をしている生徒は1名のみであり、その他の音楽系の部活動をしている生徒は全員が学校外で音楽の習い事をしてきた。したがって、音楽経験有群はかなり長期間学校外で音楽経験を積んでいることになる。

楽器の音色を聴き分ける問題6のトランペットとホルンの正答率では、わずかに音楽経験無群の正答率が音楽経験有群の正答率を上回るものの、それ以外では、音楽経験有群の正答率が高い。10ポイント以上の差がある課題は、問題1、問題2、問題6のクラリネット、ヴァイオリン、チェロ、ティンパニ、問題7のファ#、シ♭であった。特に問題7の派生音課題では、音楽経験無群は、ファ#が19.4%、シ♭が27.8%と非常に低い正答率となり、音楽経験有群との差は、それぞれ

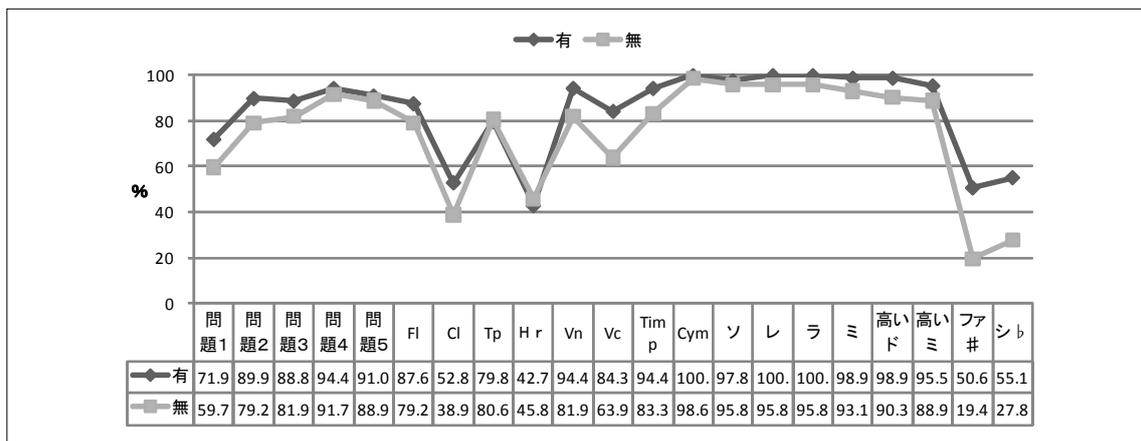


図6 音楽の習い事 or 音楽系の部活動の有無別の正答率

31.2ポイント、27.3ポイントの開きがあった。通常、読譜することはあっても、記譜の習慣があまりないことが推察できる。(三村真弓)

#### 4. おわりに

今回の調査では、4校の中学1年生がかなりの聴取力を獲得していることが明らかとなった。それには、調査内容が小学校6年生のレベルであったにもかかわらず、調査時期が1月であったために、中学校での音楽科授業をすでに8か月も受けていたことが原因としてあげられる。これまでの共同研究の結果から、4校ともに質の高い音楽科授業を行っていることが明らかとなっており、小学校修了時点での聴取力がどのくらいであったかは、今回の調査結果からは推測できない。

本研究者たちは、過去に入学直後の中学1年生を対象とした音楽科学力調査を行ったことがある。その音楽科学力調査は、主として、聴唱・視唱の力と、音符・休符・記号と和音記号の知識を、小学校修了時点でどのくらい獲得しているかを明らかにするものであり、今回の聴取力に着目した調査内容とは異なるが、音楽経験無群つまり小学校音楽科を唯一の音楽学習の機会とする群は、すべての課題で得点が低迷し、悲惨な結果となった<sup>8)</sup>。今回の調査も、中学校入学直後に実施していたら、違う結果となったかもしれない。

今回の調査結果から課題として明らかとなったことは、出題問題の難易度である。問題4の旋律の聴き分けの課題では、解答用紙の楽譜上に旋律線の動きを書き込んでいる例が複数見られた。つまり、音高を確実に聴き分けられなくとも、音の上がり下がりでおおよその見当がついた可能性があるのである。また、楽器の音色の聴き分けでは、楽器名を記号で選択する方法をとったために、難易度が低くなった。楽器名を記入する解答方式にすれば、もっと正確な学力がわかった

に違いはない。今後は、調査内容・方法、調査時期に関して詳細に検討する必要がある。

本調査で着目した聴取力は、表現活動に必須である視唱力・視奏力の育成の前提となるものであり、鑑賞活動をより豊かに充実させるためにも必要となる重要な音楽科の学力である。今後もこれを詳細に調査することによって、聴取力育成プログラムに必要な情報を得たいと考える。(三村真弓、伊藤 真)

#### 注及び引用文献

- 1) 三村真弓, 光田龍太郎, 松前良昌, 桑田一也, 吉富巧修, 高旗健次, 藤井恵子「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(3) —中学生の批評能力及び鑑賞能力に着目して—」『学部・附属学校共同研究紀要』第38号, 2010, pp.167-172。
- 2) 文部省『昭和33年度 全国学力調査報告書』文部省調査局調査課, 1959, p.71。
- 3) 文部省『昭和41年度 全国小学校・中学校学力調査報告書』文部省調査局調査課, 1968, p.48。
- 4) 国立教育政策研究所教育課程研究センター「特定の課題に関する調査(音楽)調査結果(小学校・中学校)」2010, p.5。  
([http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei\\_ongaku/houkoku\\_zentai\\_001.pdf](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_ongaku/houkoku_zentai_001.pdf))
- 5) 前掲書2), p.71。
- 6) 前掲書3), p.48。
- 7) 前掲書4), p.28。
- 8) 吉富功修, 三村真弓, 光田龍太郎, 藤井恵子, 桑田一也, 松前良昌, 増井知世子, 原 寛暁「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(1) —中学校入学時の音楽学力の実態を中心として—」『学部・附属学校共同研究紀要』第36号, 2008, pp.155-163。